



患者さまやご家族のリクエストを即座に弾く「院内流し」

## 院内バイオリン流し

医療法人社団総合会 理事長

武蔵野中央病院 院長

牧野英一郎

「コーちゃん大好きだったねーママ!」。娘さんの言葉につられ、私はコーちゃんこと越路吹雪さんのシヨールよろしく、「サントワマミー」に続き、「ラストダンスは私に」をバイオリンで弾き始めた。間質性肺炎等で入院中の高齢女性患者さまの枕元である。

「ママ、踊ってたね、歌ってたね」。娘さんも一人で踊り、患者さまは子熊の縫いぐるみを顔の前に抱き、彼(?)の手を取り揺らしていらつしやる(写真)。澄んだお声で歌われもした。「音程もいいね、マスク着けてても。懐かしいね」と娘さん。酸素吸入のリザーバーマスクは12リットルであった。患者さまは24時間後に息を引き取られ、歌詞通りの「ラストダンス」となった。

音楽への夢止みがたく、研修医を終えたところで親に内緒で東京芸大

楽理科に入った私は、父が亡くなり、残された病院に戻って三十余年。診療と経営の合間に、音楽を病院に溶かしこもうとしてきた。幼い日、精神科単科だった(今は内科も2病棟ある)病院での、患者さまの歌う歌謡曲・詩吟・浪曲・大正琴、院長だった父が職員や患者さまと踊った民謡等。これらと、自分が好んできたクラシック音楽との間に、「溝」があるのが気になっていた。

東京芸大で古今東西の音楽に触れ、「音痴」と片づけられやすい非クラシック派の方の歌いかたやリズム感、日本の伝統音楽の特徴と一致することに気がついた。ブームだった音楽療法も、まずは「溝」を埋めるよう、日本人の伝統的な音や音楽への感性から出発できないか。院内外での体験等より、『日本人のための音楽療法(幻冬舎)』を出版した。書中のQRコードからユーチューブの特定ファイルに辿り着き、日本人の好むスタイルを動画で視聴できる。

実際には、院内では集団コーラスは職員に任せ、私は内科病棟の個々の患者さまのベッド脇へ伺い、その方その時のリクエストを即座に弾く「流し」

スタイルが多い。コロナ禍前は私が弾くと直ちに鍵盤ハーモニカで裏メロを奏でる音楽療法士・植村麻紀さんと流していた。想い出すのは、「すすきの中でも中洲でも俺が行くとバンドがこれをやった」という『赤と黒のブルース』を、オムツの積まれたベッド上で歌った方。意識障害ながら『男はつらいよ』や『サウンドオブミュージック』を弾くと声を発する女性の死後、娘さんが訪れた時、気配を感じ「エーデルワイス」を弾くと、かつてない艶と伸びで響いたこと等々。

昨年春のコロナクラスターを越え夏に診療再開し、流しも一人で再開した。通常の医療だけでなく「患者さまに心地良いことはバイオリンでもオムツ交換でもアート」、「ここからアート(心・体・アート)の病院」と唱えていたことを、「どうぞ 忘れぬないで」と、コーちゃんに歌われた気がしている。

### 牧野英一郎

(まきの えいいちろう)

1951年群馬県生まれ。慶応義塾大学医学部卒。医療法人社団総合会理事長・武蔵野中央病院院長。精神保健指定医、精神科専門医・指導医、介護支援専門員。東京芸術大学音楽学部卒。同大学院修了(音楽学)、日本音楽療法学会認定音楽療法士。